



七十人
ヨーク・ちょうろう
クレビンガット長老

サッカーと日曜日

ドイツでは、サッカーは一番人気のあるスポーツです。5才のとき、父がわたしをサッカークラブに入れてくれました。週に3、4回練習がありました。試合はほとんど土曜日か日曜日にありました。クラブチームでサッカーをしていないときは、友達とサッカーをしていました。ほとんど毎日、太陽がしずむまでサッカーをしました。

15才のとき、もっと大きな町のチームでプレイするようになりまし。サッカーにもっと真剣に取り組むようになったのです。練習の回数もふえました。もっとたくさんの場所に行き、もっとたくさんのチームと試合をするようになりました。サッカーがわたしの生活すべてになりました。

そして、もうすぐ18才になるとい。あるコンサートに行き、自分と同じくらいの年の男の子に会いました。かれはとても目立っていました。お酒もたばこもせず、悪い言葉も使いませんでした。わたしはその理由を知りたいと思いました。かれが末日聖徒イエス・キリスト教会の会員であることが分かりました。かれのもはんを見て、もっと教会について学びたいと思いました。その後、わたしは教会に入りました。

バプテスマを受けて、二つのこ

とを学びました。一つ目は、安息日にサッカーをしてはいけなくて、教会に行かなければならないことです。二つ目は、天のお父様はわたしに、伝道に出てほしいと思っておられることです。でも、わたしはサッカーがかなり上手でした。小さいころからずっと一緒にサッカーをしてきた友達がいました。わたしたちは二人とも、プロのサッカーチームからさそわれました。友達は、プロになることにしました。わたしは、サッカーをあきらめて、伝道に行くことを選びました。教会が真実であると知っていたので、それを選ぶのはむずかしくはありませんでした。

でも、家族や友達にとってはわたしの選。びを理解するのはむずかしいことでした。わたしが何をしているのか分からなかったのです。両親はわたしに、友達がサッカーをしている新聞の記事を送ってきました。わたしの心はおだやかではありませんでした。でも、伝道に出たことを後悔したことは一度もありません。

わたしが伝道に出ることを選んだので、天のお父様は毎日わたしを祝福してくださいました。平安をあててくださいました。正しい選択をすることであてられる良い気持ちを感じました。■



イラスト：ケビン